今に残る歴史の情景

平田が歩んだ、時の道のりを辿る

できごと

旧石器時代		上平木（浄土屋敷遺跡）に人が往来
縄文時代	原始	下羽田付近（下羽田遺跡）に人が居住
弥生時代		上羽田（内堀遺跡）中羽田（五反田遺跡）に人が居住
古墳時代前期	古代	雪野山古墳が造られる
古墳時代後期		八幡社古墳群ができる
飛鳥時代		六〇四年（推古天皇12年）聖徳太子、十七条憲法制定
飛鳥時代		六四五年、大化の改新が始まる
飛鳥時代		六七二年（天武元年）、羽田公矢国が壬申の乱で活躍
奈良時代		蒲生郷に条里制が敷かれる
平安時代中期		一〇四九年（永承4年）、羽田庄が皇室領となる
室町時代後期	中世	後藤氏が中羽田に来住し、後藤館を築く
一五六三年		後藤賢豊が嫡男（壹岐の守）と共に主君に謀殺される
一五七〇年		柴田勝家が瓶割山で六角勢と戦う
一五八二年		後藤高治が山崎の合戦で破れ領地を失う
一六〇一年		上羽田が仙台領となる
一六五五年		仙台藩代官派遣（陣屋）
一七五〇年	江戸	中羽田に奥田孫太夫父子の墓ができる
一八六八年 明1	近代	明治維新
一八七一年 明4		廃藩置県
一八八九年 明22		6か村が合併し、平田村が誕生
一八八九年 明22		町村制施行
一九〇〇年 明33		平田尋常小学校開校
一九一三年 大2		湖南鉄道（現近江鉄道）が全線開通
一九四五年 昭20		上羽田にグラマン戦闘機が不時着
一九四五年 昭20		太平洋戦争終結
一九四八年 昭23		組合立蒲生中学校開校
一九五四年 昭29		八日市市が誕生
一九六〇年 昭35		平田幼稚園開園
一九六二年 昭37		平田公民館設置
一九六七年 昭42		八日市西小学校開校
一九七一年 昭46		六つ木排水路竣工
一九八二年 昭57		船岡中学校開校
一九八九年 平1		雪野山古墳の発掘開始
一九九二年 平3		雪野山トンネル開通
二〇〇五年 平17		東近江市誕生
二〇〇五年 平17		平田地区まちづくり協議会発足
二〇一九年 平31		平田コミュニティセンター改築

第1部　- 武家 -

中世から近世にかけては、武家政権の時代であり、平田地区にもその統治の証となる遺構が残されています。中羽田に残る後藤館跡、上羽田に残る仙台藩の陣屋跡とゆかりの神社や仏閣が、そのすがたを今に伝えています。

第2部　- 小学校と昭和のくらし

国造りは人造り。平田小学校は明治政府の維新政策で誕生し、昭和42年に統合されるまでの間、地域と共に歩み多くの卒業生を送り出しました。そして今、その姿は消え去りましたが、人々の心の中に、有りし日の情景が残されています。

第1部

後藤館跡

中世、武家統治のはじまり

武家

門跡に残る石垣

「 後藤館跡には、西辺の南北が約 120 m、東辺の南北が約 100m、東西幅が約 100 mの台形状の敷地に、門の石垣や土塁、堀の一部が残っている。昭和 58 年に滋賀県の史跡に指定された。後藤氏は他に、雪野山城、佐生城を構え、観音寺城内にも大きな屋敷を置いていた 」

市道沿いに残る土塁と堀跡：案内板ははめこみ

観音寺騒動と六角家式目

六角家重臣とし権勢を誇った後藤賢豊でしたが、永禄六年（一五六三年）10月、当時の当主である六角義治（義弼）に、嫡男（壹岐守）と共に謀殺されてしまいます。これは賢豊の力を恐れるあまり義治がとった暴挙であり、家臣達は揃って反発しました。これは、義治が先代の義賢（承禎）から家督を継いだ5年後の事であり、このとき義治はわずか19才でした。

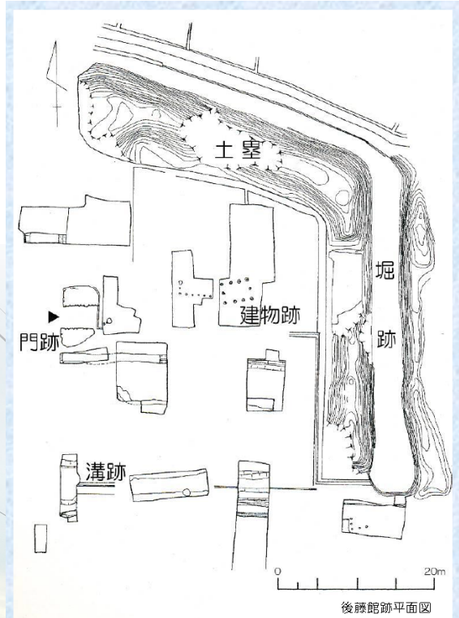
この事件は観音寺騒動と呼ばれ、これにより六角家は一挙に弱体化しました。そして永禄10年（一五六七年）4月、このような当主の暴走を避けるために六角家の権限を制限する、六角家式目が制定されました。

家督を継いだ次男、後藤高治

後藤賢豊と嫡男壹岐守の死後、次男高治が後藤家の家督を継ぎ六角氏に仕えます。そして5年後の永禄11年（一五六八年）9月、六角氏は、信長の足利義昭を擁した上洛戦で破れて観音寺城を失い、家臣達は散らばっていきます。

安土桃山時代を迎えると、近江は織田信長に支配されます。この時期、後藤高治は早々と織田信長の軍門に下っていたようです。このため、安土城での相撲大会で相撲奉行に任ぜられるなど信長に重用されました。

しかし、本能寺の変の後の山崎の戦い（天下分け目の天王山の合戦）で高治は、明智光秀に組したため、この地を追われ、平田地域の領地は豊臣秀吉のものになりました。そしてその後この領地は、在京賄料として徳川家康に与えられました。



出典：東近江市の遺跡シリーズ３ 「後藤館跡」より

後藤氏とその居館、後藤館

中世の統治の姿を証す後藤館

中羽田町の東の端、ちょうど上羽田町の西方に接するあたりに、大きな土塁で区画された一角があります。ここに室町時代この地に来住し、この付近一帯を治めたとされる後藤氏の居館が建っていました。

古代から中世の始めにかけて、この地は羽田公矢国（はたのやくに）一族の勢力圏であったと考えられています。その後、荘園開発（羽田荘）により領地が形成されていき、平安中期以降は皇室領になったとされています。

その後、日本は武家政権に移行していきますが、この地のその頃の統治についてはあまり語られておらず、中世の平田地域の統治を物語るものは、この後藤館跡以外にほとんど見当たりません。

また、後藤氏がここに領地を得た経緯は定かではなく、後藤家の系譜も明らかにされていません。しかしこの壮大な後藤館跡を見る限り、後藤氏がこの地を治めていた事に、疑いの余地はなさそうです。

六角家の重臣、後藤賢豊（ごとうかたとよ）

一方で後藤氏は、近江の守護職を務める六角家の有力な家臣としても活躍しました。

特に後藤賢豊の代には当主の力をしのぐほどの権勢を誇り、一時は当主に代わって六角家を取り仕切っていたとも言われています。賢豊は、文武の両方に秀でており、六角家臣達からの信望も厚かったとされています。さらに後藤氏には、蒲生氏郷の生家である蒲生家や、北伊勢の千種（ちくさ）家との縁組による、有力武家との強い絆がありました。

しかし後に、この実力が災いをもたらします。

写真 - 左側：
上羽田町の西方側から見た後藤館跡の全景。後方にそびえる雪野山の山頂には、後藤氏の付け城、雪野山城があったとされる。

写真 - 右側：
田園が広がり、後方に中羽田町、下羽田町、上平木町の町並みが見える。
写真の右端、上平木町の後ろの山は瓶割山。戦国時代に柴田勝家が布陣したとされる。

仙台藩と他の領主

平田を治めた

伊達政宗、平田に所領を得る

関ケ原の戦いで戦功を上げた家康の家臣たち。平田の領地はそのうちの四家に分け与えられた。その中でも最も広い領地を得たのは仙台藩でした。独眼竜政宗の異名を持ち、数々の武勇が伝えられる野心家、伊達政宗が初代藩主。立藩から明治になるまで伊達家が藩主を務めた事から、伊達藩と呼ばれる事もあります。

伊達政宗は、関ケ原の戦いの直前に徳川家康から「徳川方へ加勢すれば旧領を回復し、百万石に加増する」という約束を取付ていました。世に云う百万石のお墨付きです。しかしその約束は果たされず、代わりに与えられたのが、上羽田村などの蒲生の地でした。そしてその後、上羽田村は、明治になるまで仙台藩の領地として統治されました。

伊達政宗像：
東福寺霊源院蔵

伊達政宗略歴：
戦国末期から江戸初期にかけて活躍
豊臣家、徳川家に仕える
伊達家 17 代目当主
仙台藩初代藩主
独眼竜の渾名を持つ
1567 年 - 輝宗の子として誕生
1636 年 - 死没

今に残る仙台藩統治の証

上羽田町には、仙台藩ゆかりの神社やお寺が現存し、仙台藩統治時代の様子を今に伝えています。

上羽田町南方に残る鹽竈神社は、本拠陸奥で守り神としていた鹽竈神社を勧請したものです。

また上羽田町北方の徳昌寺は、伊達家の近江における菩提寺的な役割を果たしたと言われています。

二六八年も続いた統治のすがた

室町時代、後藤氏によって治められていたこの地域は、豊臣秀吉・徳川家康の領有期を経て仙台藩、彦根藩、石河（いしこ）氏、市橋氏の領地に分割されました。

この領地の分配は、徳川家康が関ケ原の戦いで勝利した翌年の、一六〇一年（慶長6年）に始まり、この統治の姿は、版籍奉還が行われる一八六九年（明治2年）までの、二六八年に渡って続きました。

年表 分割統治された期間

江戸期を通じて、分割が続いた

分割統治の期間

年	出来事
一六〇〇年	関ケ原の戦い
一六〇一年	平田地区の領地分配が始まる
一八六八年	明治維新
一八六九年	版籍奉還
一八七一年	廃藩置県

陣屋跡（空き地）

仙台藩の陣屋が置かれていた場所は空き地になっており、遺構らしきものは何も見当たらない。

伊達家の家紋 - 竹に雀
（他にも多くの家紋が使われていた）

石河（いしこ）氏 ― 上平木と中羽田を治めた旗本

旗本・石河氏は美濃国の出身で、古くは斎藤家の家臣だったと言われている。その後、織田信長・豊臣秀吉に仕えた。

関ケ原の戦いでは豊臣方に付いたため領地を失った。しかし、その子孫が徳川家に仕えて戦功をあげ、寛永2年（一六二五年）蒲生など3郡に領地を与えられた。上平木に残る古文書には、日吉神社（旧八王子神社）への寄進に関する記録が残っており、上平木との係りの一端を知る事ができる。

石河家の家紋 - 丸に笹竜胆

市橋氏 ― 下羽田を治めた旗本

旗本・市橋氏は、日野に本拠を置く仁正寺藩・市橋家の分家。本家の市橋家は以前、越後の三条藩主であり、徳川家の家臣として四万一千三〇〇石を与えられていた。ところが長勝の代に跡継が途絶え、その領地を失う事になった。しかし長勝の甥である長政への家督相続が許され、蒲生地域に二万石の領地を得て仁正寺藩を立藩する事ができた。

そしてその後、二千石を娘婿の市橋長吉に分与し、その長吉が旗本市橋氏として、下羽田を治めた。

市橋家の家紋 - 三つ盛り菱

彦根藩 ― 柏木と下平木（現平田町）を治めた大名

桜田門外の変で暗殺された、幕末の大老井伊直弼。そして湖畔にそびえる国宝彦根城。歴史に名を刻んだ藩主や、数々の史跡により、その名を知らない人はいない。

井伊家は、関ケ原の戦いの後、近江に領地を得て彦根に本拠を移した。当初、石田三成の居城であった佐和山城に入ったが、慶長8年（一六〇三年）今ある彦根城の建築を開始する。その後の戦功により、元和3年（一六一七年）に蒲生に領地を得た。この時、柏木と下平木が彦根藩の領地になった。

井伊家の家紋 - 彦根橘

― 江戸時代の領地支配のすがた ―

＊石河氏、市橋氏は旗本

江戸時代、平田地区は仙台藩、彦根藩、石河氏、市橋氏の領地に分割されて統治されていた。
また周辺の地区も同様に、分割されていた。

石高は「旧高旧領取調帳」（明治元年取調旧高）「滋賀県市町村沿革史」による。

引用：八日市の歴史

在京賄料と領地の分割

＊在京賄料とは、京都に置かれた家臣の屋敷の維持経費に充てる為の手当。

なぜこんなに分割されてしまったのか？そもそも事の起こりは、豊臣秀吉が在京賄料の名目でこの地域を徳川家康に与えた事にあります。

その後、家康は関ケ原の戦いで豊臣側に勝利し、秀吉に貰った領地を戦功のあった家臣たちに分け与えます。このように細かく分割したのは、「家臣の所領を分散させる事によって力を弱める」という意図があったようです。この時、平田地区は四家に分配されその状態が明治まで続きました。

雪野山の麓に残る、赤穂浪士
奥田孫太夫父子の墓碑

風誘う　花よりもなお　我は又
春の名残を　如何にとやせん

この辞世の句を残して切腹した主君、浅野内匠頭長矩の無念を晴らすため、家臣四十七名は吉良邸への討ち入りという、殺傷事件を引き起こしました。

この事件は赤穂事件と呼ばれ、幕府・公儀に対する反逆行為として浪士たちに切腹が命じられました。しかし、庶民には主君の無念を晴らした「忠君の士」として受け止められました。そしてこの事が後の歌舞伎、仮名手本忠臣蔵の大ヒットに繋がりました。

奥田孫太夫父子の墓所に建つ墓碑と、それぞれの花押

この吉良邸への討ち入りは赤穂浪士四十七士によって実行されました。しかしそのうちの一人が姿を消したため、実際に切腹したのは四十六人だったそうです。

この討ち入りで中心的な役割を果たした人物のひとりに、奥田孫太夫という名の浪士がいました。そしてこの孫太夫とその子、貞右衛門の墓所が中羽田町にあります。そこには墓碑が建てられており、それを建立した奥田本家によって今も守られています。

なぜ赤穂から遠く離れたこの地に奥田家の本家があり、墓碑まであるのか？これはだれもが疑問に思うところです。しかしそれはそれほど不思議な事ではありません。何故なら、揺れ動く時代の中で、仕官・縁組などの武家ならではの事情によって、繋がりが生まれたからです。

赤穂浪士・奥田孫太夫と奥田家、その系譜を紐解く

奥田孫太夫と貞右衛門

まず、墓碑の主である奥田孫太夫父子が、何者なのかを、知っておかなくてはなりません。

父、奥田孫太夫重盛は、赤穂四十七士の一人であり、大太刀の使いの剣客として知られていました。赤穂城主・浅野内匠頭長矩の馬廻役・武具奉行をつとめ、江戸詰で百五十石を給されていました。馬廻役というのは主君の警護役ですので、彼が武芸に秀でるとともに内匠頭の厚い信頼を得ていたことがわかります。

そして奥田孫太夫は、その主君に対する忠義を貫くため、堀部安兵衛や高田郡兵衛と共に江戸急進派の中心になり、大石内蔵助に討ち入りの実行を強く迫りました。

またこの孫太夫には後継ぎになる男子が無く、一人娘に養子を迎えました。それが、子として弔われている貞右衛門行高です。貞右衛門は野洲郡比留田村（現・野洲市）の近松家出身で、赤穂藩の加東郡勘定方をつとめていました。

そして、貞右衛門が討ち入りに参加し、切腹した時、彼には清十郎という二歳の子どもがおり、後に仁尾家の養子となり、阿波国徳島藩士となったとされています。

『義士四十七図　奥田孫太夫重盛』（尾形月耕画）

年表

奥田家の発祥から、墓碑か建てられるまで。

ルーツ

室町時代の末期、奥田三右衛門、尾張奥田にて奥田姓を名乗り、その嫡男・七郎五郎道家が美濃に移住。その弟、美作が近江に移住して佐々木六角氏に仕え六角氏没落後、嫡男・孫右衛門は豊臣秀吉に仕える。

奥田家

- 元禄14年　奥田孫右衛門の長男、久右衛門が羽田郷に来住
- 元禄15年　奥田美作の三男・某が伊勢に移り内藤家に仕える
- 元禄16年　奥田某の子・孫太夫が、赤穂の浅野家に仕える
- 寛延1年　奥田久右衛門元吉の子、奥田元長と元統とが、墓碑を建立。

江戸時代の始め

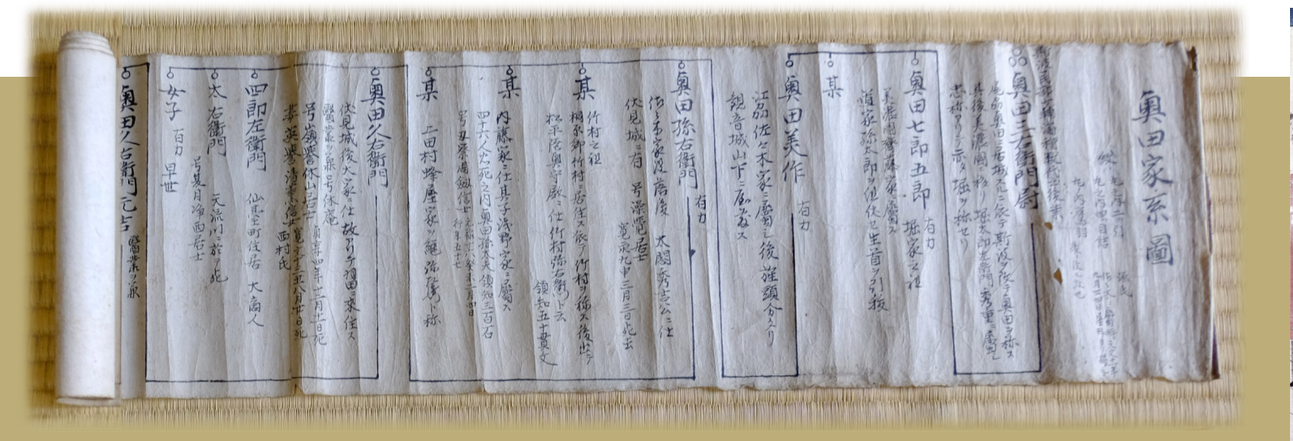
赤穂浅野家・忠臣蔵

- 1701　当主、浅野内匠頭長矩が切腹。
- 1703　赤穂四十七士が吉良邸へ討ち入る。
- 1748　仮名手本忠臣蔵が大阪竹本座で初演。
- 1750　寛延3年

孫太夫は大太刀使いの剣客：孫太夫は大太刀の名手であり、その刃渡は２尺余りであったとされている。

刀の画像出典：刀剣ワールド

巻物に記された系図：奥田家所蔵



『誠忠義士聞書之内 討入本望之図』歌川国芳 画国立国会図書館所蔵

雪野山の麓にある墓碑

奥田孫太夫父子の墓碑

雪野山の麓、歴史公園のすぐ近くに建てられている。戦時中は課外授業として、平田国民学校生徒たちによる墓参りが行われた。

孫太夫と貞右衛門の墓碑は雪野山の麓、女坂の登り口付近にあります。この周辺には多聞院などがあり、雪野山散策ルートの要所になっており、この墓碑の入口には案内板が設置されています。

墓碑はこの案内板から30メートルほどのところにあります。墓碑の表には「浅野内匠頭家頼四十六義士・奥田孫太夫重盛、同貞右衛門行高」「元禄十六癸未二月四日」と刻まれています。裏側には、墓碑の建立年代と建立者の名前が彫られています。

風化してすこし分かりにくくなっていますが、「寛延三年十月二十五日」「奥田元長・奥田元統」とよみとれます。

墓碑の表面に刻まれた元禄十六年（一七〇三）二月四日は、赤穂浪士たちが切腹した日です。「家頼（家来）四十六義士」とあり、義士の数が「四十七」ではなく「四十六」になっているのは、その当時、討ち入り後に姿を消した寺坂吉右衛門が、義士としては数えられていなかったためです。

なお、この墓碑が建立された寛延三年（一七五〇）は、浪士たちの討ち入りから四十九年後のことです。

なぜここに墓碑が？

ではなぜ、討ち入りから四十九年も経ってから、ここに墓碑が建てられたのでしょうか？

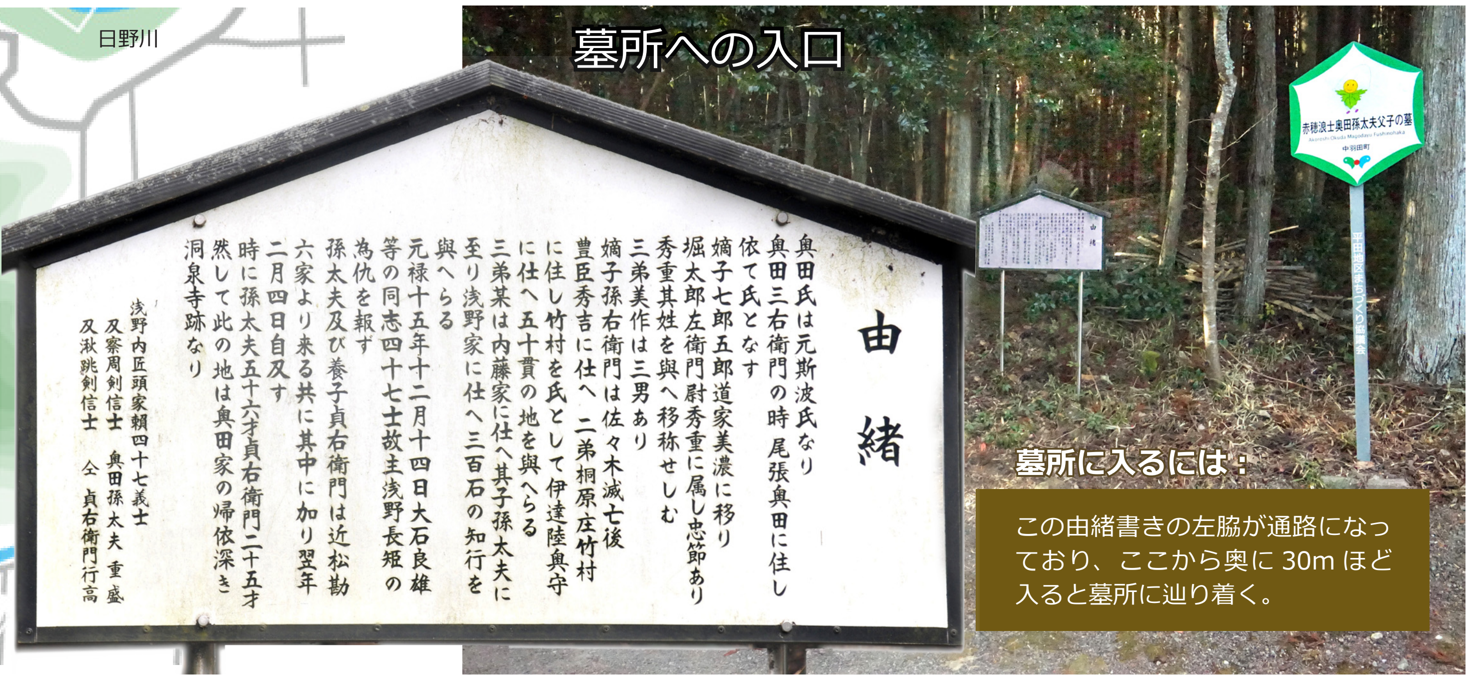
事件から四十九年後の寛延三年は、仮名手本忠臣蔵の初演から二年後です。この時期には、赤穂・花岳寺でも四十六士の墓碑がつくられています。この頃は、討ち入り行為の美化を禁止した幕府の姿勢が緩んできており、墓を建てるのには良い時期だったと考えられます。

なぜこの地に墓碑が建てられたのかについては、建立者、奥田元長・元統と孫太夫との関係を見ればわかります。

中羽田の奥田家に伝わる系図には、中羽田の奥田家は赤穂の奥田家の本家にあたり、孫太夫と元長・元統は三代前で繋がっています。忠臣蔵によって赤穂浪士の討ち入りが美談として賞賛を浴びる中、それに加わった義士の墓碑を本家が建てる事は、ごく自然な行為であるといえます。

さらに、貞右衛門の子である清十郎の碑が、中羽田から約2キロメートルあまり離れた平田町に残っています。

なお、奥田孫太夫の本来の墓は他の浪士と同じ、高輪の泉岳寺にあります。



墓所に入るには：

この由緒書きの左脇が通路になっており、ここから奥に30m ほど入ると墓所に辿り着く。

アクセス

奥田孫太夫は切腹待ちの時、「切腹の稽古をしたことが無くどうすれば良いのか？」と大真面目に指南を求め、周囲を和ませるなど、気遣いの人でもありました。その孫太夫父子の墓所は、雪野山歴史公園から徒歩５分、女坂の入口付近にあります。

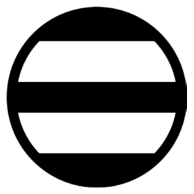
奥田家系図

- 将軍を補佐する将軍に次ぐ最高の役職（細川・斯波・畠山）→（室町幕府管領家　足利氏の血を引く）
- 奥田家は斯波（シバ）氏（尾張の守護）の出
- 奥田三右衛門（尾張奥田村・現稲沢市）＝妻
  - 長子　奥田七郎五郎
  - 二男
  - 三男　奥田美作（江州・佐々木氏に属す。観[illegible]山下に屋敷）＝妻
    - 長子　孫右衛門（佐々[illegible]後　秀吉に仕え伏見城に移る）＝妻
      - 長子　久右衛門（故ありて羽田に来住→一六〇〇年代半ばと推定。江戸初期家光・家綱のころ）＝妻
        - 久右衛門元吉（医業を兼ねる）＝妻
          - 長子　久右衛門元長（庄屋・一七五九年没）
          - 二男　万弥元統（医者）
          - 女
          - 女
          - 四十七士討ち入りの四十九年後、元長と元統が中羽田に孫太夫と貞右衛門行高の墓碑を建立。
    - 某　近江八幡・竹村氏
    - 某　孫太夫（鳥羽城主・内[illegible]）＝妻
      - 子　孫太夫重[illegible]（当[illegible]える[illegible]家に仕える[illegible]七士）[illegible]となり[illegible]家断絶[illegible]家に属す）＝妻
        - 娘＝貞右衛門行高（養子。四十七士）（中主・近松家出身。医家として現在も続く。祖父は御典医として浅野家に仕える）
          - 清十郎（親と祖父が切腹時二歳。仁尾官右衛門の養子となる）
        - 弟・僧侶（江戸谷中の長福寺）
        - 弟・仁尾官右衛門（徳島藩・松平淡路守に仕える）
        - 異母兄・近松勘六行重（四十七士）
    - 某

フォント変更

奥田家に伝わる家系図

奥田家には巻物の形で系図が残されており、各所で紹介されている孫大夫の系譜の基になっている。



奥田家の家紋 - 引両紋
奥田氏の祖とされる斯波氏、足利氏もこれと同じ家紋。

平田駅前に残る「奥田清十郎の碑」の碑文より

清十郎は上記長福寺（江戸谷中の長福寺）に預けられたが、住職は幕府の追及を恐れ、父祖の地に近い西生来村に隠した。

その後、当地の領主松平淡路守が清十郎を知り、禄を給し、藩士に列した。清十郎の屋敷は椿御殿とうたわれ、代々栄誉の家とたたえられた。

この章は、八日市郷土文化研究会発行の「蒲生野第32号」に掲載された記事を参考に作成。

第2部

小学校と昭和のくらし

平田小学校の思い出

卒業生の記憶と記録を紡ぐ

ここにも激動の昭和がありました

昭和中期の平田小学校。出典：私とあなたの平田地区50年

我が学び舎、平田小学校

人づくりは国づくり。国民の全てが平等に学べる教育環境を整えるため、明治政府は「小学校令」を発して全国に小学校の設置を促しました。これを受け、明治33年に平田尋常小学校が誕生しました。

学校は、修業年限4年の初等過程と、修業年限2年の高等小学校の2校に分かれていました。それ以前にも羽田と平木に学校はありましたが、民家や武家屋敷を利用した簡素なものでした。その後、昭和の戦時期には名前が平田尋常小学校から平田国民学校に変わります。そしてその教育内容も時代の影響を受け様変わりします。

平田小学校　校歌

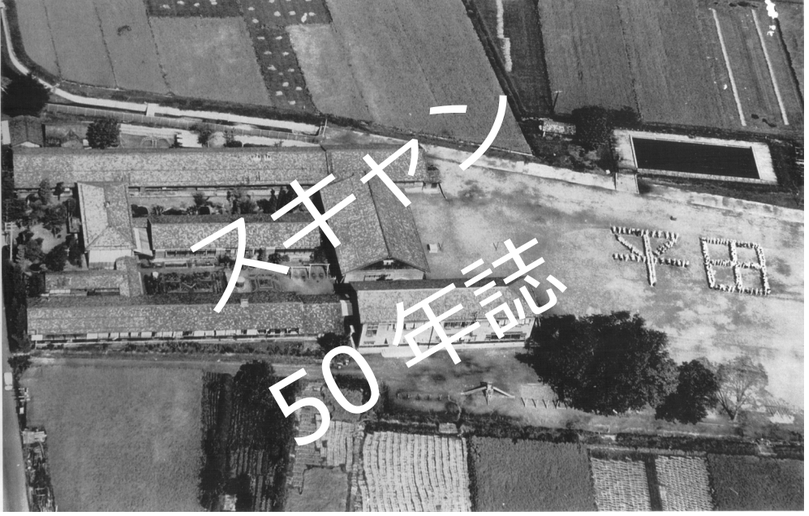
瓶割の山　史にしるゝ　雪野の峰を　前にして
そびゆる我等の　平田校　はげまんかなや　いざともに

紫におう　蒲生野に　みのうゆたけき　わが里に
祖先のいさを　うけつぎて　はげまんかなや　いざともに

御国のみ為　村の為　つくす誠の　ひとすじに
燃ゆる我等の　平田校　はげまんかなや　いざともに

終戦後、平田国民学校は平田小学校に名を変えて、平和な時代の人づくりの役割を担います。そして昭和42年に市辺小学校と統合され、八日市市立八日市西小学校が開校。

平田小学校は役目を終えます。



平田小学校の全景 - 昭和 41 年
平田小学校は、昭和 42 年に市辺小学校と統合されて八日市西小学校になったが、校舎は昭和 51 年まで残っていた。　出典：私とあなたの平田地区 50 年

大正末期から昭和の始めにかけて、中国大陸に進出していた日本は現地政府との対立が深まり、太平洋戦争への道を歩み始めます。

ちょうどこの頃、平田小学校では校舎の増築が繰り返されていました。そしてようやく、昭和42年まで続く、平田小学校のの最終的な校舎の形が出き上がり、新しい昭和の時代に相応しい教育環境が整いました。

そこで、昭和の平田を象徴するこの平田小学校の姿を、当時の在校生の記憶と残された資料を頼りに振り返ってみました。

昭和初期の卒業記念写真

昭和9年の卒業記念写真が見つかりました。下欄をご覧ください。これは最終的な校舎の形が出来上がった頃のものです。ここには昭和3年に入学し、6年間過ごした子ども達の姿が写されています。

この写真を見ると、当時の情景が思い浮かびます。さながら、二十四の瞳にあるような、先生と生徒の心温まるふれあいが繰り広げられたに違いありません。そしてこの卒業式から7年後（昭和16年）の12月には、太平洋戦争が勃発します。

開戦時にはこの卒業生のほとんどが成人を迎えています。このため、卒業生の多くが戦場に駆り出され、戦死された方も少なくないのではないかと思います。

年表

平田小学校の、開校から統合まで。

- 1874　明治 7 年　羽田学校 開校
- 1875　明治 8 年　平木学校 開校
- 1900　明治 33 年　平田尋常小学校開校
- 1923　大正 12 年　講堂建築
- 1931　昭和 6 年　満州事変 勃発
- 1941　昭和 16 年　太平洋戦争開戦
- 1945　昭和 20 年　終戦
- 1967　昭和 42 年　平田小学校 廃校　八日市西小学校開校

昭和９年
卒業記念アルバム

正門：左手にある奉安殿は、戦後すぐに撤去された。

教職員

男子卒業生

女子卒業生

開校までの道のりと校舎の建設

寺子屋から小学校へ

明治のはじめ頃まで、初等教育は寺子屋で行われていました。この寺小屋は一般家庭や寺院・武家屋敷の一室を利用して開かれ、上羽田、中羽田、下羽田にあったとされています。

そしてこの寺小屋は、明治5年に新たに制定された学校制度によって役目を終え、学校による教育に移行します。

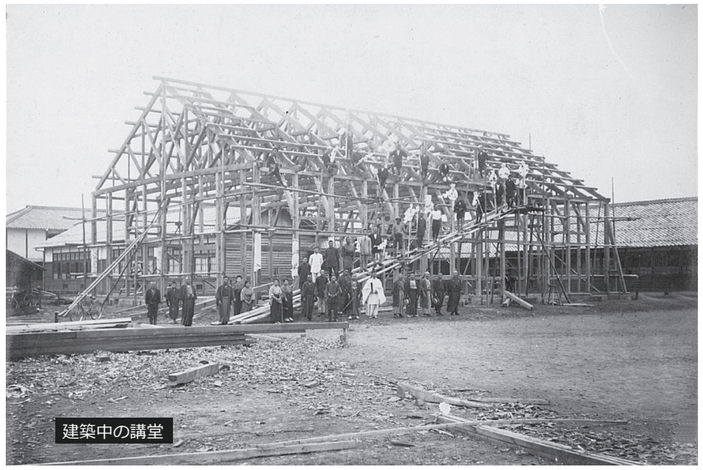
平田小学校の開校と建設

新しい学校制度のもと、明治7年には羽田学校、明治8年には平木学校が開校しました。

そしてその後の明治33年に、平田尋常小学校が開校し、それまでの羽田学校と平木学校はこの一校に統合されました。

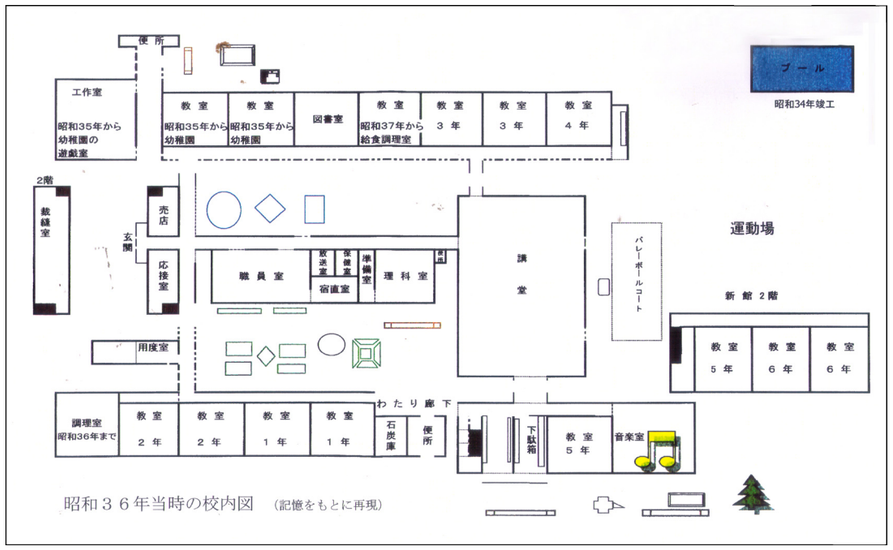
学校の建設は、一時期に全校舎が建てられたのではなく、何度も増築する事により建て揃えられたようです。明治42年と大正2年に教室増築、明治43年に運動場拡張、大正3年に奉安殿落成との記録があります。そして、大正12年には講堂が落成しています。その上棟式の日に撮られた写真では、増築の歴史を垣間見る事ができます。さらにその後も増築が続けられました。

そして、平田小学校は昭和42年、八日市西小学校への統合に伴って廃校になりましたが、校舎は昭和51年ごろまで使われました。



講堂の上棟式後の日の記念撮影。骨組みだけの講堂の後に、北校舎と、職員室があった建物が見える。講堂の南側には建物が見えず、南側の二階建て校舎が、まだ建っていない事が分かる。

昭和 36 年頃の平田小学校の見取り図



昭和３６年当時の校内図　（記憶をもとに再現）

平田小学校の最後の姿

平田小学校は、幾度も増築を繰り返して、その形が出来上がりました。そして昭和42年の廃校まで、地震や台風、さらに戦争を乗り越えて多くの卒業生を送り出しました。

現在この跡地には平田コミュニティセンターが建てられ校舎は残っていませんが、その入口には当時の門柱が残されています。

激変する時代と、目に浮かぶ学びの情景

学校生活を振り返る

古き良き、戦前の学校生活

昭和初期、太平洋戦争が始まる前の学校生活は平穏なものでした。

そこで、平田小学校で教師として勤務されたことがある上平木町の光井宣雄さんに、自身が生徒として同小学校に通われていた当時の様子をお伺いしました。

光井さんは校内での勉強よりもむしろ、自然と親しんだ記憶が強く残っているようでした。

日野川での魚とり

ある日、学校に行くと「今日は天気が良いので日野川にいくぞ！」と先生が。そしてその一言で、全員が教室を出て日野川に魚とりに行ったそうです。その途中には雪野山があり、峠（腰越）を越えなくてはなりません。しかし先生からは峠道では無く、道の無い山中を越えるよう指示があり、生徒たちは思い思いに山中に入り、自分でルートを見つけて日野川まで行ったそうです。

その日の思い付きで課外授業に切り替えたり、子ども達に、道の無い危険な山中を歩かせる事など、今では考えられません。しかし当時の小学校では、珍しい事ではなかったようです。

何事にもおおらかな古き良き時代の情景が浮かびます。そこには、自らの力で困難を乗り越え、豊かな創造力で時間を楽しむ子ども達と、それを見守る先生の姿がありました。

しかしこれは太平洋戦争が始まる前の話です。開戦の昭和16年、平田尋常小学校は平田国民学校に名を変え、戦意を昂揚し戦争に勝つための教育が始まりました。そして、戦況の悪化と共に軍事色がさらに強まり、戦争を続けるための、勤労奉仕の受け皿へと変化していきます。

尋常小学校の時間割（復刻）。科目と時間数は小学校令で定められていた。

出典：はなまるブログ

二宮金次郎の銅像

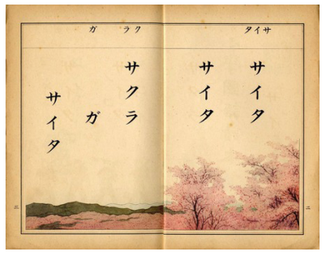
修身と二宮金次郎

平田尋常小学校の正面玄関前には、薪を背負った二宮金次郎の銅像が建てられていた。戦前には「修身」という教科があり、勤勉と親孝行を重んじる道徳教育が行われました。修身の教科書では、二宮金次郎がその手本として取り上げられました。そして教科書の挿絵を元にして作られた銅像が、各小学校に設置されました。これは奉安殿と共に戦前の教育を象徴するものでしたが、戦後、修身が教科から外された後も銅像は撤去されませんでした。

戦前の教科書

昭和8年から15年までの間、全国の尋常小学校では国語教育に「小学国語読本」という名の、国定第4期国語教科書が使用されました。これはカラーで印刷された、最初の低学年用教科書でした。

「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」で始まる事からサクラ読本という愛称で呼ばれました。



国定第４期国語教科書

軍事一色・戦時下の学校生活

戦時中、平田地区は空襲を免れ、直接的な攻撃の被害はありませんでした。しかし一億総決起の国家体制の中、生活の全てが軍事一色に染まり、平田小学校の学校生活も一変しました。

尋常小学校から国民学校へ

開戦の昭和16年、戦時体制強化の一環として学校制度が変更され、尋常小学校は国民学校に変わりました。開戦後、日を追うにつれ軍事色が強まれ、小学校でも戦う為の訓練を目的とした実践教育が行われるようになりました。

学校へは、列を組んで軍隊の行進のように大きく手を振り、軍歌を歌いながら登校する毎日でした。そして体育の授業では、戦場での基本動作の一つである匍匐（ほふく）前進の実技教習が取り入れられました。

運動場周辺のようす

運動場の周りは野菜畑として利用されました。また秋口には、イナゴを乾燥させる為の、干し場所として運動場の一角が使われました。

そして、運動場には防空壕が掘られていました。このあたりは、八日市飛行場に向かう爆撃機の飛行ルートになっているらしく、B29がこの運動場の真上を通過しました。

学校生活

終戦に近づいた頃の学校生活について、当時の在校生の方々にもお話を伺いました。皆さんから口をそろえて出るのは「その頃は学校で勉強したという記憶はあまり無い」という言葉でした。教室での学習より、運動場の周囲に植えられた野菜の世話、山裾あたりでの松根油の採取などの、奉仕活動が多かったようです。また、食料として供出するイナゴの採取が宿題として出され、イナゴを自分たちで採ったり親にとってもらったりして学校に持っていったそうです。

学校に持っていく弁当は麦飯で、贅沢をしていないか、先生が中身を調べてまわりました。

はりぼての戦闘機

生徒が作った、はりぼての戦闘機

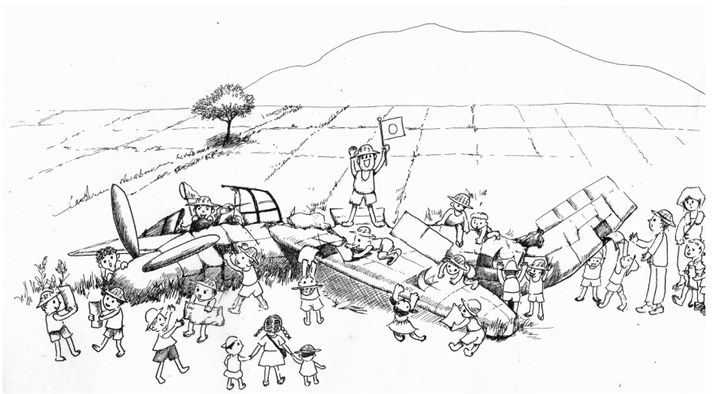
出典：上羽田町のあゆみと思い出

陸軍からの依頼を受け、小学生たちで力を合わせてはりぼての飛行機を作りました。木と竹で原寸大の骨組みを作り、その上に紙を貼って仕上げました。

これは「敵機に偽の飛行機を見せて誤爆させる」という事を目論んだものでしたが、この偽物が爆撃される事はありませんでした。

グラマン艦載機が不時着

あと20日で終戦を迎える昭和20年7月25日、上羽田の上空で米艦載機グラマンＦ６Ｆの編隊と陸軍の五式戦闘機二十数機との空中戦があり、五式戦闘機の銃撃を受けたグラマンＦ６Ｆ機が西方の水田に胴体着陸しました。この事はすぐに平田中に広がり、多くの人がその様子を見ようと、現場に集まりました。平田小学校の児童も先生に連れられ不時着した敵軍機を見に来ました。


墜落したグラマン艦載機： 疎開で平田小学校に通学していた子供達が、先生に連れられて見学。翼によじ登り、のぞき込んだりコーティングを剥がしたりした。まわりは黒山の人だかり。昭和 20 年 7 月 25 日に墜落。

経済成長とともに消え去った生活様式

昭和30年代を振り返る

昭和中期の田植え風景。中羽田町の北西端あたり。背景は雪野山

出典：私とあなたの平田地区 50 年

何百年も続いた営みがわずか十年で様変わり

昔話に「おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました」という一節があります。これは遠い昔の日常を描いたものですが、山があり小川の多いこの地域でも、このような生活が何百年も営まれてきました。

昭和に入ってからも、「お父さんは牛で田をすきに行き、お母さんはかまどでご飯炊き。そして戦後生まれの私は、にわとりのお世話」といったような暮らしが行われてまれてきました。

しかし、このような暮らしは昭和30年代に大きく変化し、昭和40年頃には見られなくなりました。わずか10年間で一変したのですから、まさに生活に革命が起こった歴史的な時期であると言えます。

昭和のくらし

戦後10年を経過した昭和30年代は、高度経済成長の時代であり、その中頃には電話や自家用車、さらに、「三種の神器」ともてはやされたテレビ、洗濯機、冷蔵庫が普及し始めます。

この事により生活は徐々に近代化されて行きますが、昭和40年頃までは昔ながらの、自然の恵みや家畜に依存した生活が残っていました。

住まい

当時の一般的な農家は、「ザシキ」「デ」の六畳二間に、「ヘヤ（ナンド）」「ダイドコ」の田の字型の間取りに、かまどがあり、風呂場、便所が門口近くにありました。また、「ツシ」と言って一年中の燃料となる柴を保管する二階部分がありました。

かまど・七輪

かまどはクドといい、当時は各家にありました。茶釜、三升釜、五升釜、八升釜などを組み合わせた三つのクドでご飯を炊いたり、煮炊きをしました。燃料は柴などです。また、魚を焼くときは七輪に炭を入れ火を起こしました。

風呂

風呂は家の中の土間にあり、桶風呂が一般的でした。風呂の水はガチャコンポンプ（手押しポンプ）で何度も汲み上げバケツで運びました。

燃料は山で刈った柴などです。また、「もらい風呂」といって隣の家同士などでお互いに行き来することもありました。形態も桶風呂から五右衛門風呂に変化していきました。

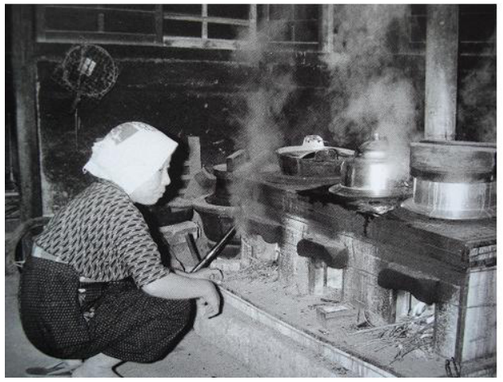
にわとり

農家の多くは庭先でにわとりを飼い、卵をとって食べたり、食用にしたりしました。毎日水と餌をやります。餌は、すいすい葉やゆりご（くず米）です。

蚕を飼っている家もあり、繭を作り、八日市の製糸工場へ納めたりしていました。

婆さんが語る柴 刈りの想い出

昭和30年代の終わり頃まで、各家庭での主要な燃料は柴であり、山での柴刈りが定期的に行われていました。当時娘一人で暮らしていた大正生まれのお年寄りから、この柴刈りの話を聞きました。これは、上平木町の戦時中の昭和20年頃の様子です。



かまどによる炊事

出典：JapaneseClass.jp

ガスや電気による炊事用具が普及するまではかまどが利用された。各家庭には、茶釜、三升釜、五升釜、八升釜等のサイズに合わせた、三連のかまどがあった。

おはなし

月に一回ぐらい、朝早く（7時半ごろ）弁当を持って山裾に集合します。

3つの組がーグループになり、それぞれが鳴谷・城の谷・城跡のあたりに柴刈りに行きました。持参物は、リヤカー・縄・かま・熊手などです。松の葉や小枝が落ちたものが沢山あるところを探し、熊手で集め、男が縄で束に硬く結います。

その作業が終わるころお昼になります。昼食はみんなが輪になり、弁当を食べました。　昼過ぎになると、柴は二束ずつをひとつにし、名前がつけられます。それをひとりあたり五つか六つもらえるよう、男が準備してくれます。

その後名前の付いた二束になった荷を背負い何回も往復して山下へ下しました。

山の上では、あちこちに散らばった自分の束をみんなが必死になって探し合い、まるで戦場の様でした。女の自分には二束を背負って立つのがやっとのことで、本当に重くて大変でした。

山下へ下した柴は、リヤカーに乗せますが、家族に迎えに来てもらう人や、迎えに来てもらえない人もあり、みんなが助け合って持ち帰りました。

イラスト挿入

農家と農業

牛が大切な働き手

昭和30年代ごろまでは、ほとんどの農家で牛が飼われていました。家を入ってすぐのところに、「うまや」があり、土間のところに牛がいました。ひとつ屋根の下に人間と牛が同居していました。牛の餌は、毎朝、田んぼの草を刈り、藁などを混ぜて与えました。

田んぼを鋤くには、牛がまっすぐ歩くように、牛の先に歩く鼻持ちがいて、後ろには「からすき」という道具を使って土を耕しました。こうして牛は農家にとって大切な働き手でした。

農作業のようす

田植えは、苗代で大事に育てた苗を運び、一株一株丁寧に人の手によって行われました。作業は一家総出で、また近所や親せきと組み手伝い合いながら進めました。食事は、朝、前昼、昼、後昼、夜と五食ぐらい摂っていました。田植えが終わると、早苗振り（田植えを無事終えたことへの感謝と慰労）となりました。

秋には収穫作業の稲刈りが始まります。のこぎり鎌を使って一株ずつ手で刈り取り、束にします。その稲束を竹と杭で組み立てた稲架に掛けて干しました。羽田では、地干しもありました。地区の一部の湿田での作業は、足のくるぶしまで沈んでしまうくらい、田面が柔らかく大変な作業となりました。

稲架で乾かした稲束から籾にする脱穀作業は、足踏み式稲こき機を使いました。その後「イジコ」に入れて、家に持ち帰ります。籾は家の庭や軒先にむしろを敷いて広げ天日干しをして、均等に乾かすため一日に一・二回混ぜ返しました。

冬には、収穫したコメを入れる俵を編むことが仕事でした。

農業と暮しの近代化

戦後の復興が一段落した昭和三十年代は、高度成長期と呼ばれる時期であり、農業と日々の生活が大きく変化しました。その原動力となったのは、大規模に行われた土地改良事業であったと言えます。

河川の改修により水利環境が整い、圃場整備により農作業は効率化しました。さらに土地改良事業は雇用を生み出し、農業の兼業化が進みました。一方で、耕作地の周辺や小川に沿って植えられていた桑の木が伐採され、細々と続けられていた養蚕業も、このあたりの時期に消え去りました。

このように、昭和30年代に進められた土地改良事業は、単に地面の形を変えただけでなく働き口を生み出し、所得を増やす事によって農家の暮しを大きく変化させました。

牛も家族の一員

田すき

稲刈り

脱穀

もみ干し

出典：私とあなたの平田地区 50 年